

霞ヶ浦の水草とのつき合い40年

後藤直和

私は茨城の県北の方の出身であるが、高校の生物教師になった昭和26(1951)年以来、県南の土浦市に住むようになった。そして近くにある霞ヶ浦の水草には1955年頃から関心を持つようになり、3～4年間土浦入奥の方の沈水植物、浮葉植物の種類を調べたり、オニバスなどの記録写真を撮ったりしたが、それをまとめて論文や報告書にするということまでは行かないままだった。

茨城県では高校生物教師の研修団体として「茨城県高等学校教育研究会生物部」(略称茨高教研生物部)があり、1967年にその団体の夏季研究大会で浮島地区を中心とする霞ヶ浦の生物調査を行った。その時私は水生植物調査のグループに参加し、それまで知らなかった水草も何種類か知ることができた。その時の結果の一部を記すと、沈水植物18種、浮葉植物3種(アサザ、ガガブタ、ヒルムシロ)が確認され、沈水種のクロモヤマトモは約3mの深さの所まで分布していた。しかし18種に含まれるシャジクモ科の4種(シャジクモ、カタシャジクモ、ケナガシャジクモ、ヒメフラスコモ)については、同定が正確であったかどうか不確実である。

それから4年度の1971年に高教研生物部が県教育庁の文化課の委託を受けて霞ヶ浦地区と北浦地区・酒沼(水戸市の近くにある)地区の生物調査を行うことになり、私は霞ヶ浦地区植物調査班の責任者にされてしまった。調査範囲は霞ヶ浦全域と湖岸から台地斜面までの陸地を含む広大なものであり、実質的な調査期間は6月から10月までの5か月間であった。調査日数は夏休みに多くとることができたが、6月、9月、10月にはそれぞれ1～2日しかとることができず、かなり無理な仕事であったけれども若さがあったので、我武者羅に取り組んでどうにか全域を見ることができた。

その当時の霞ヶ浦の水草は種類数、生体量ともにまだ豊富であり、高浜入の水域ではオニバスの大群落も見られた。しかしその高浜入でも土浦入でも7～8月にはミクロシスティス(通称アオコ)の繁殖が著しく、水面に浮かんだそれが岸辺に吹き寄せられて数cmの厚さの層をなしている所があり、富栄養化と汚濁が進んでいることが感じられた。またそのミクロシスティスの層は分解して行く過程で一時的にルリ色(コバルトブルーというべきか)になる現象が見られ、さらに分解が進むと強い腐臭を発していたものである。

この時の調査の結果は「昭和46年度特別地域自然財分布調査報告書—茨城県高等学校教育研究会生物部」にまとめられているが、その内容についての記述は省略する。

それから3年後であったと思うが大滝先生の訪問を受け、高浜入のオニバス生育場所を案内させていただいた。しかしその時にはオニバスの大群落はなくなっており、岸の方で貧弱なものが僅か2～3個体見られたに過ぎなかった。なお大滝先生は1971年の調査の時、一緒に植物班で活動してくれた当時水海道一高勤務の五木田悦郎氏を通して私のことを知り、訪ねて来られたのであった。

その後1979年に東京での当研究会の第1回全国集会の案内をいただいたのでそれに参加し、それから1～2年後に入会したように記憶している。またその頃、茨城県の水産関係の職員であった知人のところで偶然に、現会長の桜井先生が建設省の委託で1972年に霞ヶ浦の植物調査をされた報告書があることを知り、それを見てその1年前に私達が実施した調査の内容や報告書がいかに稚拙なものであったかを思い知らされた。

1983年に全国集会在霞ヶ浦湖畔で行われた時、大滝先生からできれば茨城高教研生物部との共催

にしたいと依頼され、そのことを部長に伝えたがそれは実現しなかった。結局私個人で参加したものの、地元の会員でありながらお世話らしいことは何もできず、申し訳ない気持ちでいっぱいであった。また当時、信州大学教授であった桜井先生が霞ヶ浦や北浦の水生植物を何回も調査されていたのに対し、茨城県内では組織的な調査がほとんど行われていなかったことも恥ずかしいと思わずにはいられなかった。

私は学生時代(旧制東京高師)も教師になってからも、学術的な調査の方法やその結果のまとめ方、論文の書き方等についてよく勉強してはいなかったもので、研究発表や論文の投稿に自信がなく、当研究会の全国集会での発表や会報への投稿もしないでいたが、定年退職後の1994年に大滝先生の助言を得て連名で「霞ヶ浦の水生植物の現状と過去」というテーマで釧路の全国集会の時に発表し、それを論文の形にまとめたものを会報54号に掲載させていただいた。

その1年後の1995年に霞ヶ浦で世界湖沼会議が開催されることになったので、思い切って上記のテーマで応募してみたが、「ポスター発表」という部門に回され、会議場で発表することにはならなかった。

湖沼会議の2年ぐらい前に地元の土浦市では「世界湖沼会議市民の会」という市民団体が発足

し、いろいろPR活動などをしたが会議後には、前からあった「霞ヶ浦情報センター」という団体と合併して「社団法人・霞ヶ浦市民協会」というものになり、「泳げる霞ヶ浦をとりもどそう」ということに取り組んでいる。

現在、私はその市民協会の一会員として時々会報に水草のことなどを書いたり、霞ヶ浦周辺の植物観察会の案内役を引き受けたりしている。しかし今の霞ヶ浦の水草は、沈水植物は皆無と言ってよいほど少なく、浮葉植物もアサザとヒシ類が比較的健在である以外はほとんどなくなっている。さらにヨシなどの抽水植物帯も面積は湖岸堤ができる前の半分以下に減少している。30年前に今の状態を想像することは全く不可能であった。また逆に、今の若い人には30年前以前に存在した豊かな水草の群落は想像もできないであろう。そう思うと暗然とした気持ちになってしまうが、少し希望を持てるのは、私などよりずっと若い人が中心になって人為的にアサザ群落をつくり、さらにそれによって沈水植物帯や抽水植物帯を復活させようという活動を始めており、国土交通省もそのような運動に理解を示すようになってきたことである。30年前の状態に戻すことは不可能であろうが、現在よりは良くなって行くことが期待できると思われる。